

## 7 花き類

### (7010) カーネーション

本作物は、安房地域を中心に県下全域で施設栽培が行われており、火山灰土、河成壤質土において作付されている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、肥効調節型肥料や化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ等の被害が見られることから、フェロモン剤や被覆資材の活用、反射フィルムマルチによる生育促進とスリップスの防除により、化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥等を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なもののは施用は避ける。
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 畝内施肥や灌水同時施肥(点滴灌水)等により、施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。 3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。
化学合成農薬低減技術	1 機械除草技術 刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。 2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 抵抗性品種の利用により病害の発生を抑制する。 4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 5 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。 6 熱利用土壌消毒技術 蒸気や熱水により土壌病害虫を防除する。 7 光利用技術 黄色灯や粘着資材等の利用により害虫を防除する。 8 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。 9 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 10 マルチ栽培技術 反射フィルムマルチの利用によりスリップス等を防除する。
その他留意事項	・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。

(7020) ストック

本作物は、安房地域を中心に県下全域で施設及び露地栽培が行われており、火山灰土、海成砂質土において作付されている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、コナガ等の被害が見られることから、フェロモン剤や被覆資材の活用により、化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 ギニアグラスやソルゴー等を栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間において定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>4 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>5 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</p> <p>6 光利用技術 粘着資材を利用して害虫を防除する。</p> <p>7 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>8 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(7030) きく

本作物は、山武・安房地域を中心として県内全域で栽培されている。

これらの栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や、緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替したり、肥効調節型肥料を使用していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、生物農薬の利用や熱利用土壌消毒、機械除草・マルチ栽培による雑草防除、フェロモン剤の利用等により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものへの施用は避ける。 2 緑肥作物施用技術 野生種エンバク、ソルゴー等を栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて定植する。
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。 3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。
化学合成農薬低減技術	1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。 2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 3 対抗植物利用技術 前作物にギニアグラスやクロタリヤ等の線虫対抗植物を栽培する。 4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 5 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。 6 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。 7 光利用技術 粘着資材を利用して害虫を防除する。 8 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。 9 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。 10 マルチ栽培技術 着色マルチの利用により、雑草を防除するとともに、土壌の跳ね返りによる病害の発生を抑制する。
その他留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</li> <li>・無側枝ギク、スプレーギクは施肥量を輪ギクの30%減少させる。</li> </ul>

(7040) カラー（畑地栽培）

本作物は、山武・君津地域を中心として栽培されている。

これらの栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や、緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替したり、肥効調節型肥料を使用していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、熱利用土壌消毒、フェロモン剤利用により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物施用技術 野生種エンバクやソルゴーを栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>2 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>4 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</p> <p>5 光利用技術 粘着資材を利用して害虫を防除する。</p> <p>6 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>7 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(7050) サンダーソニア

本作物は、山武地域を中心として栽培されている。

これらの栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や、緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替したり、肥効調節型肥料を使用していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、熱利用土壌消毒等の利用により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物施用技術 野生種エンバクやソルゴーを栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>2 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>4 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</p> <p>5 光利用技術 粘着資材を利用して害虫を防除する。</p> <p>6 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>7 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(7060) ホワイトレースフラワー

本作物は安房地域を中心に施設栽培が行われており、砂質土から粘質土において作付されている。これらの栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入等により、地力を増進していくことが必要である。施肥については過繁茂しやすい作物のため、土壌診断に基づく適切な施肥が重要である。農薬の使用については、熱利用土壌消毒、マルチ栽培による雑草防除等により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</li> <li>2 緑肥作物利用技術 ひまわり、ソルゴー等を栽培してすき込む。</li> </ol>
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</li> <li>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</li> <li>3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</li> </ol>
化学合成農薬低減技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病虫害等を防除する。</li> <li>2 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病虫害を防除する。</li> <li>3 マルチ栽培技術 マルチ等の利用により雑草を防除するとともに、土壌の跳ね返り防止やハウス内の湿度低下を図り、病害の発生を抑制する。</li> </ol>
その他留意事項	

## (7070) ヒマワリ

本作物は安房・海匝・山武地域を中心に施設栽培が行われており、砂質土から粘質土において作付されている。

これらの栽培地域では、たい肥等有機資材の投入等により、地力を増進していくことが必要である。

施肥については、過繁茂しやすい作物のため、土壌診断に基づく適切な施肥が重要である。

農薬の使用については、生物農薬の利用等により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物施用技術 野生種エンバクやソルゴーを栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</p> <p>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</p> <p>3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術 刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 抵抗性品種の利用により病害の発生を抑制する。</p> <p>4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>5 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>6 熱利用土壌消毒技術 太陽熱等の熱を利用し、土壌病害虫を防除する。</p> <p>7 光利用技術 粘着資材や反射資材等の利用により害虫を防除する。</p> <p>8 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>9 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(7080) 花壇苗

本品目は、パンジー、ペチュニア、マリーゴールド、サルビア等多岐にわたり、県内全域で栽培されている。

これらの品目では、鉢土にたい肥等有機質資材を使用し、保水・排水性、緩衝能の高い培養土づくりをすすめる。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替したり、肥効調節型肥料を使用していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬については、熱利用土壌消毒、マルチ栽培による雑草防除、反射資材利用によるスリップス防除、生物農薬、性フェロモン剤の利用による害虫防除等、品目を考慮して導入技術を選定し、化学合成農薬の節減を進めることが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料とした堆肥で未熟なものの施用は避ける。土壌診断に基づいたたい肥の施用を行なう。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>2 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 熱利用土壌消毒技術 蒸気土壌消毒技術により土壌病害虫を防除する。</p> <p>4 光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材や粘着資材等、黄色灯等の利用により害虫を防除する。</p> <p>5 被覆栽培技術 施設開口部に防虫ネットを展張し、害虫を防除する。</p> <p>6 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行なう。</p> <p>7 マルチ栽培技術 着色マルチ、防草シートの利用により、雑草を防除するとともに土壌の跳ね返りによる病害の発生を抑制する。</p>
その他留意事項	



## (7090) べにはな

本作物は、夷隅地域、安房地域を中心に施設及び露地栽培が行われており、砂質土から粘質土まで幅広い土壌で作付されている。

これらの地域では、たい肥等有機物資材の施用による地力の増進、土壌の団粒化による保肥力の向上を進めていく必要がある。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくこと、局所施用による肥料の利用率向上を図ることで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、マメハモグリバエ、灰色かび病等の被害が見られることから、防虫ネットや粘着資材、生物農薬等を活用して、化学合成農薬の節減を進めることが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質 資材 施用技術	1 有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なもの の施用は避ける。
化学肥料 低減技術	1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて、適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。 3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。
化学合成 農薬 低減技術	1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の防除を徹底する。 2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病虫害等を防除する。 3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤 あるいは特定農薬を使用し、病虫害等を防除する。 4 光利用技術(どちらか1つでも可) ①有色粘着資材等の利用により害虫の予察、防除を行う。 ②紫外線カットフィルムの利用により害虫の侵入を防ぐ。 5 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。
その他 留意事項	

(7100) スターチス

本作物は、安房地域を中心に施設栽培が行われており、砂質土から粘質土において作付されている。これらの栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入等により、地力を増進していくことが必要である。施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替することや、肥効調節型肥料を使用していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。農薬の使用については、萎凋細菌病、灰色かび病、ヨトウムシ等の被害が見られることから、抵抗性品種の利用やマルチ、防虫ネット、粘着資材を活用して、化学合成農薬の節減を進めることが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。
化学肥料低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。 2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。
化学合成農薬低減技術	1 機械除草技術 刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。 2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 抵抗性品種の利用により病害の発生を抑制する。 4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 5 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。 6 光利用技術 有色粘着資材等の利用により害虫を防除する。 7 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。 8 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 9 マルチ栽培技術 マルチ等の利用により雑草を防除するとともに、土壌の跳ね返り防止やハウス内の湿度低下を図り、病害の発生を抑制する。
その他留意事項	

(7110) トルコギキョウ

本作物は、安房、海匝地域を中心に施設栽培が行われており、砂質土から粘質土において作付されている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、スリップス、ハスモンヨトウ等の被害が見られることから、防虫ネットや粘着資材等を活用して、化学合成農薬の節減を進めることが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 ギニアグラスやソルゴー等を栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間において定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術 刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>4 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>5 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</p> <p>6 光利用技術 有色粘着資材等の利用により害虫を防除する。</p> <p>7 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>8 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。</p> <p>9 マルチ栽培技術 マルチ等の利用により雑草を防除するとともに、土壌の跳ね返り防止やハウス内の湿度低下を図り、病害の発生を抑制する。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(7120) その他切花類

県内各地で露地及び施設栽培で栽培され、火山灰土や砂質土、粘質土において作付されている。これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していく必要がある。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくこと等で、慣行の化学肥料の使用量を減少させていく必要がある。

農薬の使用については、生物農薬の利用や土壌還元消毒、熱利用土壌消毒、機械除草による雑草防除等により、化学合成農薬の節減を図っていく必要がある。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</li> <li>2 緑肥作物利用技術 ギニアグラスやソルゴー、ひまわり等を栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間において定植する。</li> </ol>
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</li> <li>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な種類の肥効調節型肥料を選択し、施用する。</li> <li>3 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。</li> </ol>
化学合成農薬低減技術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 機械除草技術 刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</li> <li>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</li> <li>3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</li> <li>4 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</li> <li>5 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</li> <li>6 光利用技術 黄色灯や粘着資材を利用して害虫を防除する。</li> <li>7 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</li> <li>8 フェロモン剤利用技術 交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。</li> <li>9 マルチ栽培技術 マルチ等の利用により雑草を防除するとともに、土壌の跳ね返り防止やハウス内の湿度低下を図り、病害の発生を抑制する。</li> </ol>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>